介護福祉学確立に向けて
― 隣接学問諸領域との関係から ―

津　田　理恵子、樋　口　美智子、熊　谷　智加子

The Establishment of Social Care Works Science
― From the Relation with the Neighbor Learning Areas ―

Rieko TSUDA, Michiko HIGUCHI, and Chikako KUMAGAI

近畿福祉大学紀要　第７巻　第１号
（平成18年６月）

〈資　料〉

近 畿 福 祉 大 学 紀 要
J. Kinki Welf
Vol.7 (1) 49～55 (2006)

介護福祉学確立に向けて
― 隣接学問諸領域との関係から ―

津　田　理恵子[1)]、樋　口　美智子[2)]、熊　谷　智加子[2)]

The Establishment of Social Care Works Science
― From the Relation with the Neighbor Learning Areas ―

Rieko TSUDA[1)] , Michiko HIGUCHI[2)] , and Chikako KUMAGAI[2)]

社会福祉士及び介護福祉士法が制定されてから19年目を迎える。この法律において介護福祉という語が誕生したと言われている。しかし、介護福祉学は現在においても確立しているとは言い難い状況である。そこで、介護福祉学確立に向けて、介護福祉と関係が深い隣接学問諸領域との関係性を整理した上で、新しい学問領域である介護福祉学確立に向けての方向性として、専門分化を目指し、隣接諸学問を介護福祉の視点で応用して取り込み、整理した上で介護福祉学の体系化を目指すと共に、実践学として、介護実践を通した研究の積み重ねが必要であると示した。

It has been nineteen years since Law of the social worker and the certified care worker was enacted. This law established the discipline of social care work, but it is still in a developing stage. Therefore, the social care works science isn't established yet. We aim to systematize and specialize it as a new discipline. We have tried to closely relate it with inter-disciplinary subjects, and then apply and adopt the results of our study from the view point of social care work. And we have shown the necessity of the cumulative research through the discipline of practice.

Key words: social care work, social care works science, academic territory
介護福祉　介護福祉学　学問領域

はじめに

介護実践を根底から支える介護福祉学は、確立しているとはいえない。時代の変化と共に多様化している介護福祉ニーズに応えていくためにも、介護福祉の学問領域を構築していくことは、介護福祉士の専門性向上に向けても重要な意味がある。

介護福祉士が誕生してきた経緯から考えると、既存の学問をそのまま移行させるのではなく、既存の隣接学問諸領域との関係性を整理し、介護福祉に必要な学問的知見を、生活・人生レベルまで視野に入れた介護福祉の視点から応用し、体系化していく事が重要である。

今回、介護福祉学確立に向けての動きがある中で、介護福祉士の介護実践を専門学として支える介護福祉学確立を目指していくための要因として、介護福祉学と隣接学問諸領域との関連について整理したので報告する。

受付　平成18年５月１日，受理　平成18年６月７日
１）神戸女子大学　〒650-0046　神戸市中央区港島中町4-7-2
２）近畿福祉大学　〒679-2217　兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

介護福祉学と隣接学問諸領域

介護福祉学を考える上では、介護福祉の実践を裏付けていくために、介護実践の対象となる人間、対象場面となる生活、介護福祉の支援の展開方法を理解していくことが必要である。そのために関連が深い隣接学問諸領域として、看護学、社会福祉学、医学、教育学、リハビリテーション学、宗教学、死生学、心理学や、日常生活の営みに関わる家政学、栄養学など多岐にわたる学問があげられる。

新しい領域の学問として体系化を目指す介護福祉学にとって、関連する隣接諸学問との、学問的関係は、これらの既存の学問が構築してきた学問的知見、根拠に基づく理論に学ぶべき事は多く、これらの学問との関連性を整理していくことで、介護福祉学そのものも整理されていくと考えた。

特に、看護学と社会福祉学との関係性は、介護福祉が看護と社会福祉両分野の歩み寄りの中から誕生した経緯から考えても、専門性を追求する上で学ぶべき点は多く、さらに、対象への支援場面が生活であることから、家政学との関係性が深いと思われた。

そこで、看護学・社会福祉学・家政学との関係を中心に整理し、介護福祉学と関係が深いと考えられる隣接学問諸領域との関係を整理していきたい。

１．看護学との関連

鳥山咲子は「介護と看護がその源を同じくし、病人やけがの世話といった自然発生的な行為から看護から介護が分化した」[1] と記しており、看護と介護は、その源は自然発生的に行われていた行為で、古代から自然に行われていた世話、助け合い、手当てを指していると述べている。

小島洋子は、看護と介護の関係において、「看護師や介護福祉士の業務である身の回りの世話は、その人の状態に合わせてするものであるが、経験とか知見といった様な常識、つまり社会的経験の上に、教育をすることで科学的知識を獲得し、実施するべきものである」[2] と述べており、看護師と介護福祉士は共に身の回りの世話を、個々の状態に合わせて提供していくために、共に科学的知識が必要であることを示している。介護においても経験重視だけではなく、技術提供の基盤に科学的根拠が必要であることを示している。

一番ヶ瀬康子は「看護と介護は、ルーツは同じです。看護の生みの親であるフローレンス・ナイチンゲールの著作集を読むと、彼女の救貧院病院における看護という有名な論文の中で展開されているのは、まさに今日の介護です」[3] と述べており、小島洋子、鳥山咲子と同じように、その行為の源が同じであることを示唆している。

そして、看護と介護が分化していく過程において、杉本清恵は「看護においては利用者の健康面からの援助をするために看護技術を使い、介護では生存権を保障するいわゆる生活を支えていくことを中心に介護技術を提供する」[4] と示し、源は同じであっても、看護と介護の目的における相違を示している。

船曳宏保は、「看護ケアは、あらゆる日常生活行動が健康の維持に、あるいは病気の回復に適合するよう介助、代行、あるいは指示する活動である。それは、人と行動と行為のレベルに働きかけ、そのレベルの変化が身体レベルにもたらす望ましい結果を期待している活動である。これに対して社会福祉のケアは、毎日或いは毎週反復される日常生活行動の総体が、将来に備える主体と、危機に対処する主体を維持、発展させる働きを持つものであるように、持続的に指示する活動である。活動の形態は看護活動と同じである。しかし、社会福祉のケアは、反復されるひと纏まりの日常生活行動相互の意味関連を把握し、この全体が主体にもたらす結果を望ましいものにしようとするものである。人の生活は、主体によって営まれ、その主体を維持、発展させる行動である」[5] と記し、看護におけるケアは、身体レベルに望ましい結果を期待した活動であり、福祉領域におけるケアは、日常生活の総体に対して持続的に指示する活動であると、それぞれの領域における活動の目的を示している。

本名靖は、看護と介護福祉について、「介護福祉は生活（日常）を支えることで、その人の人生を援助するのであって、看護が生物レベル（生命）の観点から関わるのに対し、介護は社会レベル（社会生活・人生）からその人の人生に関わっていくのであるから、どちらの方向から日常生活を援助するかによって、日常生活の内容は全く違ったものになる」[6] と記し、人との関わり方において、看護と介護の視点の違いから、関わり方に相違があり、その結果として利用者の日常生活は異なったものになっていくと示している。

京極高宣は、「かつての看護理論では、看護の中に介護があり、介護の中に介助があるという説明が有力であったが、介護福祉士の誕生で、看護と介護が重なり合いつつ、相互に独立したところがあるとの説が現在では支配的になっている。現在でも、この介護の範囲をめぐる議論では結論がでているわけでは必ずしもないものの、看護婦と介護福祉士が共同して相互の役割分担を果たせる道のりが、現場の介護サービス実践の上で、ケアマネジメントの中で、次第に明らかになっ

てきている。いたずらな、看護と介護のなわばり争い的議論は、福祉と保健医療との連携を妨げる極めて危険な発想であり、特に福祉関係者は注意を払う必要がある」[7] と述べている。このことから、介護が分化してきた過程を熟知し、それぞれの独自性を尊重していくことの重要性が伺える。

古川隆司は、「介護福祉の直接的な方法技術の大半が基礎的な看護技術を、また介護福祉の援助過程とされる介護過程も、看護過程そのままを用いて体系化が図られた」[8] と示している。介護技術においては、その技術に専門性が問われるのは当然のことであり、源を同じくする看護の領域から、技術の裏付けを学ぶべき点は多い。しかし、そのまま用いるのではなく、個々の日常生活、人生に焦点をおいた介護福祉の視点で、看護学の学問的知見を取り込んでいくことが重要であると考える。

介護福祉の根幹をなす介護そのものは、長年にわたって専門性がない中で、経験に基づいて提供されてきた経緯がある。介護行為そのものは、身のまわりの世話や手当てであり、この行為は、古代国家の歴史書の中にも登場している。介護という語が、我が国で初めて使用されたのは、明治中期の1892年に制定された、陸軍省陸達第96号第１条第１号の陸軍軍人傷痍疾病恩給等差例で、職業としての意味を含めた介護という語が、法律上に登場したのは、1963年に制定された老人福祉法で、看護師の業と区別し、寮母が高齢者の世話をする行為として介護という語が使用された。介護の語が誕生した背景には、我が国の社会福祉の歴史において、社会福祉の拡充を目指す中で、看護師の人員不足から、高齢者の世話を介護として、法律上において規定され誕生したと考えられる。時代の流れの中で、介護という語は、誰もが自然に行う行為としての広義の介護と、専門職として個々の生活や人生レベルまでを捉えた狭義の介護に分けて概念整理をすることが出来る[9]。

看護と介護は、手当てや世話など源は同じところに、その行為の意味が存在している。時代の流れの中で、社会福祉の必要性の中から、看護行為と区別し、介護の語が誕生した経緯から考えると、看護と介護が重複している部分について、看護学が培ってきたひとつひとつの技術の裏付けとなる、科学的根拠を応用していくことが大切で、それらは、個々の生活、人生レベルまで視野に入れ、個々の福祉を追求していくという介護福祉の視点で整理し、体系化していくことが重要である。

２．社会福祉学との関連

介護福祉と社会福祉の関係性において、古川隆司は我が国における介護について「日常生活の障害によって社会生活が維持できず、陥った生活困窮に対して、社会福祉が介護を要する人々の生活援助を行ってきた」と記し、「歴史的文脈から、介護福祉が社会福祉の一環として、共通の理念を有する」[10] と記している。さらに、加納光子は、学問としての介護福祉学について、社会福祉学との関係を「社会福祉の一領域である介護問題に焦点を当てた学問である」[11] と述べている。このように、介護福祉誕生の経緯や、介護福祉が社会福祉制度下において、介護を提供していくことから考えても、社会福祉学が築いてきた既存の学問基盤を、持ち備えておくことは必要不可欠なことであると考える。

渡辺嘉久は、「看護と社会福祉が介護福祉と共有する課題について、第一に人間とその生活を対象にしていること。第二に現象面を対象とする基礎科学の影響を受ける応用科学の性格があり、その現象を構成する実践として関与していること。したがって第三に、価値自由でありえず、学問としてはモラルサイエンスとして宗教や哲学倫理との関わりを有すること。第四に、法則性から現象が常に説明可能ではなく、実践と対象の絶えざる関わりによって経験から知識を演獲する取り組みが重視されること。以上の共通性からみるとき、看護と社会福祉とは実践活動および学問的な関係が強い」[12] と、介護福祉が社会福祉と看護の共通性があることを述べ、学問的な関係が強いことを示唆している。

京極高宣は、「その性格上、ソーシャルワークとケアワークは重複する部分がある。（中略）保母あるいは、寮母なり、そういう実践をある程度勉強してこそ、彼らへのスーパーバイザーになりえるので、それを踏まえてソーシャルワーカーになるのが、本来のあるべき姿ではないかと考えている」[13] と示している。京極高宣は、ソーシャル・ワーカーの視点から、介護実践が不可欠であることを述べており、福祉サービスという観点からソーシャル・ワークとケアワークを考えると、社会福祉実践の場では、お互いが重複する部分を持ち合わせていることを指摘しているのではないかと考える。そして、ソーシャル・ワーカーにおいても、ケアワーカーの知識や技術が必要不可欠であると述べている。しかし、我が国の社会福祉教育においては、社会福祉と介護福祉は分断されて考えられていることが多く、介護は社会福祉の一領域ではないという意見も聞かれる。社会福祉士の教育カリキュラムにおいても、介護に関する科目は、介護概論のみが必修となっており、介護技術に関しての裏付けされた知識などの教育は必修科目にはなっていない。このような状況で、京極高宣が述べるような、社会福祉実践を可能にすることは

困難ではないかと考える。既存の社会福祉と新しく誕生した介護福祉は、お互いの専門性を理解し、成長していくことが重要であると考える。

これらのことから、介護福祉が社会福祉と関係が強いことが理解できる。ここで、介護福祉の概念を振りかえると、「①ソーシャル・ワークの視点を取り込み成立してきた。②ソーシャル・ワークの価値と知識に支えられている。③社会福祉の一領域である。④ミクロからマクロまでの過程で支援を展開する。⑤介護と同義語ではない。⑥常にケアが伴っている。その上で、⑦生活を支えるために専門的な技術を用いた実践概念である。⑧介護実践による福祉の探求である」[14] 以上のことが言えると考える。

これらのことから、介護福祉は基盤にソーシャル・ワークの知識や技術が必要であり、社会福祉の領域で介護福祉が提供されることから、共有する部分については社会福祉学が築いてきた既存の知見を取り込んでいくことが重要である。

３．家政学との関連

介護福祉において、生活支援という視点から考えると、家政学との関係も深く、介護技術の中でも家事支援に関しては、既存の家政学から学ぶべき点は多くあると考える。古川隆司は、「介護福祉の実践が日常生活、わけても居宅での生活をいかに成り立たせていくかをみるとき、生活学や家政学の知見に頼るところが大きい」[15] と記し、鳥山咲子は、「介護の専門性・独自性の探求において、家政とのかかわりがより必要である」[16] と述べている。そして、角間洋子は家政学概論と家政学実習の必要性について「個別のライフスタイルに対応した科学的根拠に基づく総括的な生活支援の育成において重要な意義を有している」[17] と記し、溝口佳代は「対象者を深く理解することは、人の生きていく力、すなわち人の命を支えることが目的である衣・食・住の支援のあり方の根底を支えるものである」[18] と述べている。このように、多くの研究者が介護福祉において、家政学との関係の重要性を示唆している。

しかし一方では、介護福祉と家政学との関係においての課題も示されている。介護福祉と家政学との関係性について、一番ヶ瀬康子は、「日本の家政学というのは、いまだ自然科学主義です。家政学自体がもっと社会的性格をもち、同時に日常生活の中から出発し、さらに高齢期の問題を念頭においたものになってほしいものです。そうすればこれを大いに吸収できる」[19] と示し、現状の家政学を、そのまま介護福祉に取り入れる課題を指摘している。そして奥津文子は、介護福祉士養成カリキュラムにおける科目としての家政学について、「科学的に家事を実施することに加え地域生活を豊かに展開し、自己実現を目指すという立場から家政を捉えなおす必要がある。それは既存の家政学ではなく、社会福祉的視点が加えられた新たな家政学でなければならない」[20] と指摘している。これらのことから、介護福祉領域において家政学が構築してきた、衣・食・住に関わる生活援助との関連は、生活支援という視点から考えても、その関連性は強いと思われが、既存の家政学をそのまま移行させるのではなく、人生レベルまで視野に入れ、個々の生活場面で福祉を追求していくという、介護福祉の視点を加え、応用して家政学との関連を捉えていく必要があると考える。

介護福祉の対象となる人間の日常生活は社会生活の中で、個々のライフスタイルを持ち営んでいる。そのため介護福祉においては、個々に応じた生活という視点を持ち、個々の生活を支援していく過程において、調理・栄養・洗濯・掃除など、介護技術として展開していくことが必要であると考える。この過程において、個々のライフスタイルや個別性を考慮することができなければ、それは、専門職者としての支援とは言えず、ただ単にお手伝いさんになってしまう。これらのことを踏まえて、家政学が構築してきた知見を応用し整理していく中で、介護福祉における生活支援技術を構築していくことが重要である。

４．関連領域学問との関連

新しい学問領域の体系化を目指す介護福祉学について、看護学・社会福祉学・家政学との関連性についてまとめてきた。看護学と家政学においては、専門的な技術における科学的根拠など、既存の学問をそのまま移行させるのではなく、看護学・家政学それぞれ培ってきた既存の学問的知見を、生活、人生レベルまで視野に入れた、介護福祉の視点から応用し、整理したうえで取り込んでいくことが必要である。このことは、介護福祉学と関連が深い隣接諸学問である、医学・教育学・リハビリテーション学・宗教学・死生学・心理学など多岐に渡る学問との関係性においても同じ事が言える。

介護福祉の領域について、一番ヶ瀬康子はケアワーカーの資格制度のあり方を述べる中で、研修すべき内容として、かなり高度な知識と技術が必要であるとして、4点の知識と実技を以下のように示している。「①社会福祉の倫理および制度さらに方法、②援助に必要な家政学的知識と食、衣、住生活援助のための家事実技、③摂食、排泄、衣服の着脱、入浴など介護に関する理解と援助技術、④保健・医療に関する理解」[21] このように、介護福祉領域に必要な知識と実技として、多岐に渡る学問領域を示している。

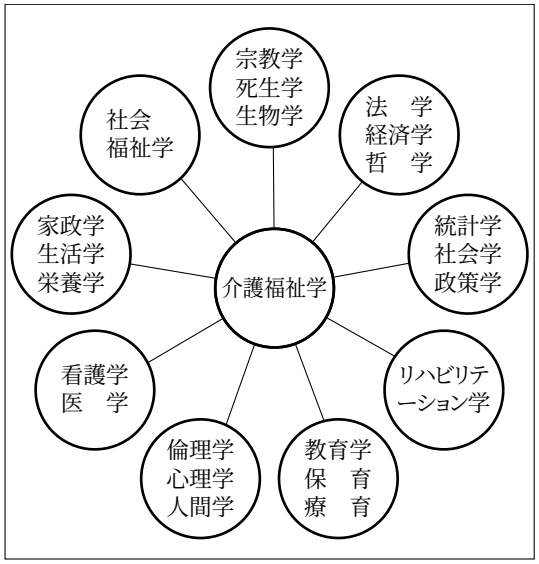

図１　介護福祉学と隣接学問

以上のことから、介護福祉学を中心に、介護福祉学と関係がある学問領域を、図式化すると、図１のように表すことができる。この図は、介護福祉学を中心として考えたときに関連がある学問領域を、介護福祉学の周りに並べた図である。

さらに、これらの学問領域を介護福祉学との関係から整理していくと、①対象となる人間理解のために、医学・宗教学・哲学・解剖生理学・死生学・倫理学・心理学・教育学・人間学・生物学、②対象場面となる生活理解のためには、家政学・栄養学・生活学・社会学・リハビリテーション学、③対象への支援方法の理解のためには看護学・家政学・社会福祉学、リハビリテーション学、④制度・政策の理解のためには、法学・社会学・経済学・政策学の、４点に分類でき、この関係と隣接諸学問領域を図で示すと図２に表すことが出来る。

この図は、介護福祉の専門性は、人を対象とした、生活場面における支援過程の展開にあることから、人間そのものを、精神的・身体的・社会的に深く理解した上で、個々の人に合わせていく必要があることから、展開に必要な科学的根拠に基づいた専門的技法と、それを応用できる能力が必要であることを考慮している。さらに、介護福祉の実践をミクロからマクロまでの過程を視野に入れた上で、介護福祉学と隣接学問諸領域との関係について整理したものである。

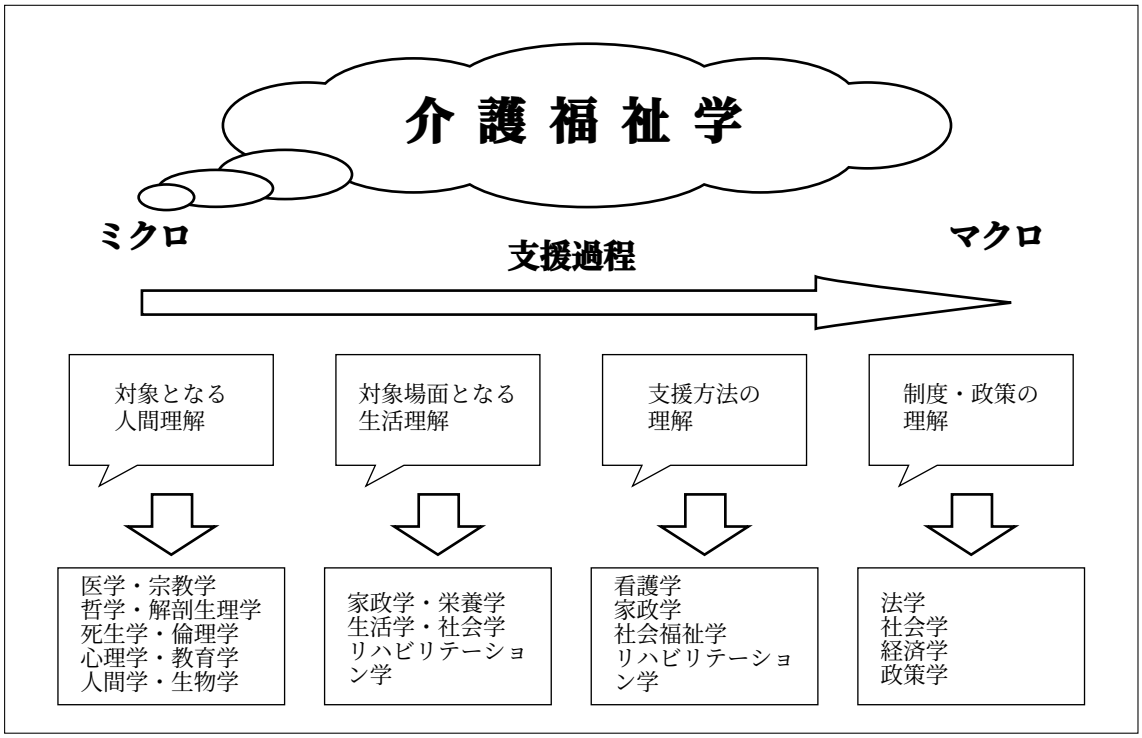

図２　一般教育科目における環境教育的内容を含んだ科目の系列

まとめ

介護福祉学と関係が深いと考えられた学問領域について整理してきたが、さらに、これらの隣接学問諸領域との繋がりを、整理し介護福祉学を、専門学として構築していく必要がある。

介護福祉学確立を目指した動向は、1993年に介護福祉士の専門職団体として、日本介護福祉学会が設立された頃からである。この学会の目的に、「介護に関する専門的教育及び研究を通して、その専門性を高め、介護福祉士の資質の向上と介護に関する知識、技術の普及を図り」[22] と、専門的教育及び研究を通して専門性を高めていくということが示された。専門性を高めていくための専門学とは、広辞苑によると専門に研究すべき高度な学問と記してある。専門学としての視点から、介護福祉学を考えると、介護福祉学は、介護実践に基づいた実践学であることから、実践研究を重ね専門性を見出していくことが必要であると考える。

以上のことから、介護福祉学を確立していくためには、①隣接学問の知見を介護福祉の視点で応用して取り込み、整理した上で介護福祉学の体系化を目指し、②新しい学問領域としての専門分化を目指し、③実践学として、実践を通した研究の積み重ねが必要であると考える。これらの介護福祉学確立に向けての要因について、図式化すると図3のように表すことができる。

おわりに

介護福祉士の実践を支える介護福祉学の確立を目指すには、介護福祉と関係性が深い既存の隣接学問の知見を、生活・人生レベルまで視野に入れた介護福祉の視点で応用し取り込むと同時に、実践を通した研究の積み重ねにより、専門分化を目指して体系化していくことの必要性が示唆された。このことにより、専門学として介護福祉学が確立し、介護福祉学をベースとした、専門職としての支援の展開が可能となっていくと考える。

今後は、介護福祉学と関係が深い隣接学問諸領域の知見を、対象個々に応じた福祉の実現に向けた介護実践に繋げていけるよう具体的な体系化に向けて研鑽していきたい。

引用・参考文献

1）鳥山咲子他　『介護福祉概論』89　学文社　1997

2）小島洋子他（『看護と介護』193-234　静岡県立大学短期大学部研究紀要第10号 1996

3）一番ヶ瀬康子『介護福祉学の探求』31-32　有斐閣 2003

4）杉本清恵『介護福祉学入門』114-116　中央法規出版 2000

5）植田政孝・船曳宏保他編『高齢化社会への総合政

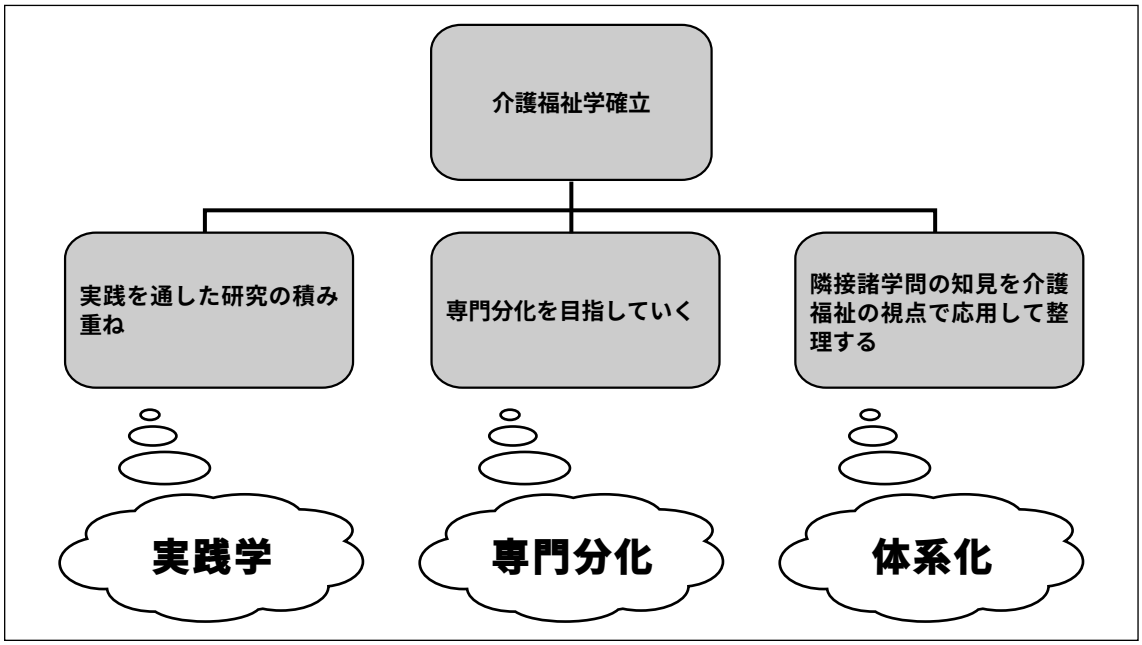

図3　介護福祉学の確立に向けての要因

策』183　新評論 1990
6）本名靖『介護福祉士養成教育の現場から』保健の科学 NO.38(5)　323　杏林出版 1996
7）京極高宣『京極高宣著作集第２巻専門職・専門教育』468　中央法規出版　2002
8）介護福祉研究会監修・古川隆司『介護福祉学』146　中央法規出版　2002
9）津田理恵子『介護福祉の構成要素に関する研究』269-286　関西福祉科学大学紀要第９号　2006
10）前掲 8）148
11）加納光子『ソーシャルワークとケアワークの相違点』ソーシャルワーク研究 15(3)　173-176 相川書房 1989
12）介護福祉研究会監修・渡辺嘉久『介護福祉学』145　中央法規出版 2002
13）京極高宣『現代福祉学の構図』69中央法規出版1990
14）前掲９）
15）前掲８）151
16）前掲 1）90
17）角間洋子『介護福祉士養成教育における家政学実習の効果』45-52　松本短期大学紀要 2004
18）溝口佳代他『各科目から考える他科目との関連性』13-22　介護福祉教育第9巻第2号（通巻第17号）2004
19）前掲３）34
20）奥津文子『介護福祉士教育の現状と課題』.273-286　佛教大学大学院紀要第 29 号 2001
21）一番ヶ瀬康子『第 13 期日本学術会議社会福祉におけるケアワーカー（介護職員）の専門性と資格制度についての意見具申について』1987
22）日本介護福祉士会『日本介護福祉学会規約』1993

裏白